

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2013～2014  
課題番号：25870905  
研究課題名(和文) モンゴル国におけるナショナル・アイデンティティの諸相

研究課題名(英文) Aspects of National Identity in Mongolia

## 研究代表者

湊 邦生 (Minato, Kunio)

立命館大学・産業社会学部・助教

研究者番号：70534907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではモンゴル国におけるナショナル・アイデンティティについて、国際調査の公開データを用いた実証分析を行った。研究の結果、モンゴル国におけるナショナル・アイデンティティの下位概念どうしの相関および、下位諸概念と他の要因との関連構造の不安定性が示された。また同国におけるナショナル・プライドが他の東・東南アジア諸国と比較して高く、排外主義的傾向がポスト社会主義国の中で突出して強いことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this research I conducted empirical analyses of national identity of the Mongolians by using cross-national survey data collected in the country. The results of the research show instability of structure of correlations among sub-concepts of national identity, as well as relation between the sub-concepts and other factors. Besides, the results revealed that the Mongolians harbor high national pride compared with East and Southeast Asians, and that they tend to have stronger exclusivism than post-socialists countries.

研究分野：地域研究(モンゴル)、計量社会学

キーワード：ナショナル・アイデンティティ モンゴル ナショナリズム 地域研究 計量社会学 ポスト社会主義  
東アジア 比較分析

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初の背景としては、**モンゴル国(以下「モンゴル」)における大規模調査データの分析に基づくナショナル・アイデンティティの実証的研究の必要性**、**ナショナル・アイデンティティの研究全体に対するアジアからの知見の提供**、**モンゴルにおける排外主義・国粋主義の台頭に対する対処法**という3つが存在した。

まず について述べる。モンゴルにおけるナショナル・アイデンティティの研究においては、その形成過程の歴史学的研究や、「民族」としてのモンゴル人意識が中心となっていた。前者では、とくに1921年の人民革命以降、ソ連の庇護を受けた社会主義国家の成員としてのアイデンティティが形成される過程が主題となっており、後者ではモンゴル・中国・ロシア等にまたがる民族としての超境性を強調するものが存在している。しかし、前者ではポスト社会主義に移行して久しいモンゴルの現状を捉えることは不可能であり、後者は「ネーション」モンゴル国の成員意識を議論の対象としていなかった。そのため、現在のモンゴル国民が有するナショナル・アイデンティティの解明が課題となっていた。

次に について述べる。ナショナル・アイデンティティについては、これまで社会科学・人文科学分野を中心に膨大な理論研究がなされてきたが、その結果ナショナル・アイデンティティの意味内容と実体を描くことはかえって困難となっていた(田辺俊介(2010)『ナショナル・アイデンティティの国際比較』慶応大学出版会)。他方、近年では個票分析が可能な社会調査データの整備、とりわけISSP(International Social Survey Programme)が1995年および2003年調査でナショナル・アイデンティティをテーマとする調査を実施したことで、定量的データ分析に基づく実証研究が進んだ。ただし、ISSPの対象国が欧米諸国に集中していることもあり、それらの研究の多くは欧米諸国を対象としており、日本や韓国を除くと、非欧米諸国に関する分析が進んでいるとは言い難い状況であった。したがって、モンゴルを分析対象とし、分析結果を理論研究と照合して考察する本研究は、理論研究・欧米中心の実証研究に対するアジアからのインプリケーションの提供を試みるものであった。

最後に について述べる。モンゴルでは近年排外主義・国粋主義的勢力の登場がみられ、彼らによる外国人排斥を目的とした暴力行為がしばしば報じられている(Branigan, Tania (2010) "Mongolian Neo-Nazis: Anti-Chinese Sentiment Fuels Rise of Ultra-Nationalism" *The Guardian (Electronic version)*, Retrieved on August 2nd, 2010, from: <http://www.guardian.co.uk/world/2010/aug/>

02/mongolia-far-right)。このような状況から、社会不安の増大や対外関係の悪化などが懸念されたほか、暴力の矛先が日本人に向けられる可能性もあった。また、上記勢力の登場の背景として、外国人や外国文化の流入による混血・混淆への懸念、あるいは近年急速に存在感を拡大する中国への強い警戒感が国民に広く浸透していることが挙げられており(前掲記事参照)、とくに後者はモンゴル関係者の中ではほぼ定説化されていた。しかしながら、これらの議論は実証的な検討を経たものではなく、そもそも排外主義・国粋主義的主張のモンゴルにおける受容度も検証されていなかった。

以上から、現在のモンゴル社会における排外主義の受容度や、その背景となる要因の解明は喫緊の課題であった。その際、既存研究では排外主義がナショナル・アイデンティティの下位概念の1つとして位置づけられており、他の下位概念との関連も示されている(田辺、前掲書)ことから、排外主義を単独で検討するのではなく、それらの下位概念と合わせて検討することが求められていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、モンゴルで実施された国際調査の個票データから、ナショナル・アイデンティティに関連する設問に着目して、以下の3つに焦点を当てた分析を行うことを目的とするものであった。

(1)**ナショナル・アイデンティティの概念構造の分析**: 排外主義、ナショナル・プライドや自文化中心主義といったナショナル・アイデンティティの下位概念と実際のデータとの適合性を検討した上で、それぞれの概念の相関を分析し、他国・地域を対象とした既存研究における関連構造が、モンゴルでも見出されるかどうかを検証する。

(2)**ナショナル・アイデンティティの下位概念についての国際比較分析**: 各設問項目に対する回答分布や設問項目間の関連等について、モンゴルと他の調査対象国・地域との間で比較分析を行い、共通点・相違点を明らかにする。

(3)**モンゴルにおけるナショナル・アイデンティティの規定要因**: (1)で検討した各概念と回答者の社会属性や社会・政治意識等との関連について、多変量解析による分析を行う。

## 3. 研究の方法

本研究では、アジアン・バロメータ第2回・第3回調査(Asian Barometer Survey 2nd and 3rd Waves, モンゴルではそれぞれ2006年と2010年に実施)および"Life in Transition Survey II"(2010年実施)の個票データを用いて分析を行った。いずれのデータでもモンゴルに特化した多変量解析を行うとともに、前者は東・東南アジア諸国・地域との比較分析、後者はポスト社会主義諸国との比較分析にそれぞれ用いている。

モンゴル研究は、これまで文献研究や、フィールド調査・インタビューなどの事例研究によって発展してきた。しかし、いずれの研究手法も、研究対象となる事例の位置づけが不明であるうえ、定量的な検証に適さないため、研究によって得られた知見の一般化と実証には限界がある。他方、モンゴルでは2000年代からとアジア諸国・地域やポスト社会主義諸国を対象とした国際調査プロジェクトが実施されるようになったことで、個票分析が可能なデータの整備がようやく始められた。ただ、モンゴル研究者によるそれらのデータの分析はいまだほとんど行われておらず、研究の蓄積は進んでいない。

したがって、本研究が用いた個票データ分析という手法は、モンゴルにおけるナショナル・アイデンティティのみならず、モンゴル研究においても先駆的なものであった。

#### 4. 研究成果

本研究の成果としては、現在のモンゴルにおいて、ナショナル・プライドや「純化主義」、排外主義の浸透度が相対的に高い、ナショナル・アイデンティティの下部概念間の関連が不安定である、ナショナル・アイデンティティの下部概念と回答者の属性等の要因との関連構造も不安定である、という3点が明らかとなった。

このうち に関しては、ナショナル・プライドの高さや「純化主義」に賛成する人々の比率が東・東南アジア諸国・地域との比較において、排外主義を受容する人々の比率がポスト社会主義諸国との比較において、それぞれ高いことが明らかとなった。 に関しては、アジア・パロメータの第2回・第3回調査データの分析結果を比較したところ、相互間で有意な関係を持つ項目が異なることが示された。 に関しては 同様、アジア・パロメータの第2回・第3回調査データの分析結果から示されたことに加え、“Life in Transition Survey II”の分析結果からは、排外主義に関連する項目が見当たらないことも示された。

以上の結果が見出された背景としては、ポスト社会主義モンゴルにおいて人々の意識を分ける「対立軸」が存在せず、ナショナル・アイデンティティについても違いをもたらす要因に乏しい点が挙げられる。現在のモンゴルでは政治的イデオロギーや価値観、エスニシティによる明確な対立が起きておらず、ナショナル・アイデンティティに関しては崇拜対象たるチンギス・ハーンなどの共通項を容易に見出すことができる。このため、モンゴルの人々は一致して国への愛着を強く持ちやすい、換言すれば人々の属性等の違いによってナショナル・アイデンティティのあり方に差が出にくいことが考えられる。

なお、本研究を踏まえた今後の展望としては、モンゴルと比較分析を行う対象国・地域の拡大、本研究成果に基づくナシヨナ

ル・アイデンティティ研究全般に対するインプリケーションの導出、社会調査・世論調査データの個票分析に基づくモンゴル研究の促進という3点を挙げておきたい。このうち については異なる調査間でも設問項目が共通していれば可能であり、排外主義項目の比較分析に関しては既に着手している。 については国内外のナショナル・アイデンティティ研究者との意見交換を行っていくことなどで、 については今後もデータ分析を継続し、結果を発信することや、他のモンゴル研究者とのネットワークを拡大し、研究に関する情報を交換するとともに、研究者間の連携を強化することなどで、それぞれ達成できるものと考えられる。

また、モンゴルでは個票分析が可能なデータがまだ限られており、これが本研究の実施に際して制約になった点は否めない。今後さらに新たな調査の実施とデータの公開が行われることで、そのような制約が緩和されることを望みたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 湊 邦生, モンゴル国におけるナショナル・アイデンティティの計量的検討 第2回・第3回アジア・パロメータのデータ分析から、立命館産業社会論集、査読有、Vol.50、No.4、2015、pp.75-92、URL: [http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/san-sharonshu/504pdf/50-4\\_02-05.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/san-sharonshu/504pdf/50-4_02-05.pdf)

② Minato, Kunio, Mongolian Tolerance and Intolerance Toward Different Cultures: An Exploration Based on Analyses of Cross-National Survey Data, Acta Mongolica, 査読無, Vol.15, 2014, pp.41-46, URL:

<http://ja.scribd.com/doc/253152875/Acta-Mongolica-%D1%81%D1%8D%D1%82%D0%B3%D2%AF%D2%AF%D0%BB-%D0%B1%D0%BE%D1%82%D1%8C-15>

〔学会発表〕(計7件)

① Minato, Kunio, “Comparative Analyses of Exclusivism in Mongolia and East Asian Societies”, 国際シンポジウム「新自由主義的グローバル化と現代東アジアの社会経済構造の変容」, 2015年3月14日、立命館大学(京都府京都市)

② 湊 邦生, 「純化主義」とナショナリズム: モンゴル国一般市民の意識分析に基づく検討、多文化関係学会第13回年次大会、2014年11月9日、コラッセ福島(福島県福島市)

③Minato, Kunio, Nationalism, Exclusivism, and Purism: An Analytical Description of National Identity in Mongolia, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014年7月19日, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

Minato, Kunio, Cross-cultural Tolerance and Intolerance in Mongolia: An Exploration Based on Analyses of Survey Data, The 2nd International Research Conference "New Trends in Mongol Studies II", 2014年3月21日, ウランバートル(モンゴル国)

⑤湊 邦生、モンゴル国におけるナショナル・アイデンティティの計測に関する諸課題、第57回数理社会学会大会、2014年3月7日、山形大学(山形県山形市)

⑥湊 邦生、モンゴル国における排外主義の現状と要因：国際調査データからの検討、多文化関係学会第12回年次大会、2013年10月20日、立教大学(埼玉県新座市)

湊 邦生、モンゴル国におけるナショナル・アイデンティティの計量的検討 アジアン・バロメータによる複数時点の調査データの予備的分析から、日本社会学会第86回年次大会報告、2013年10月12日、慶応大学(東京都港区)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

湊 邦生(Minato, Kunio)  
立命館大学・産業社会学部・助教  
研究者番号：70534907

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし